

# やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	28 / 2010 / 37-39
タイトル	暑い夏(2010)
著者名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

# 暑い夏(2010)

第3代 五十嵐正俊

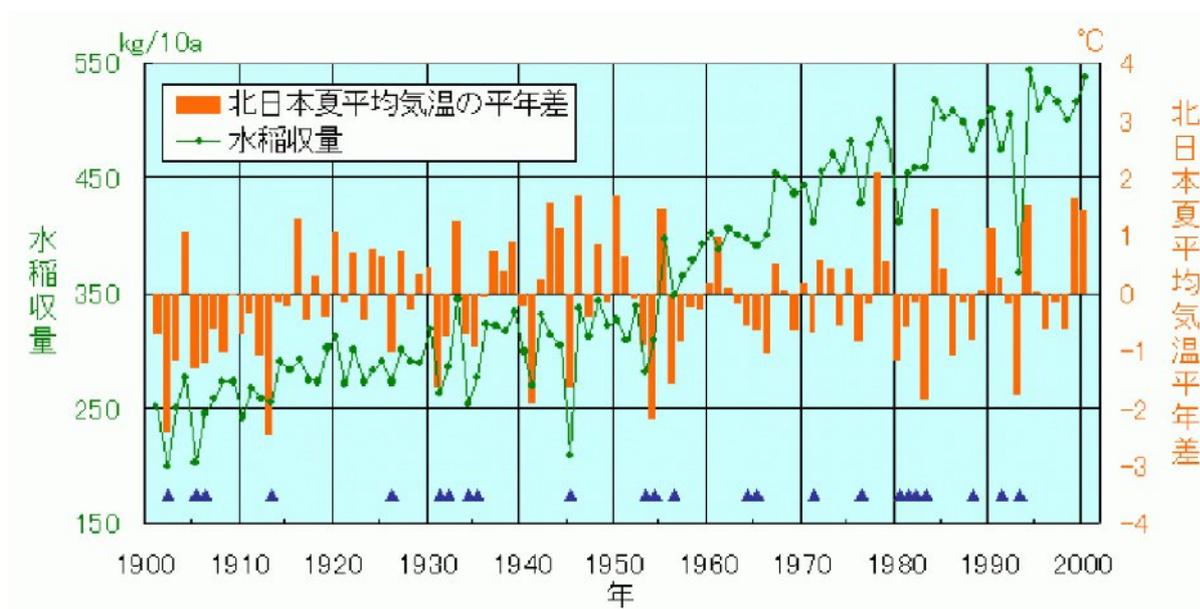
とにかく暑い夏だ。北極振動のせいで偏西風の流れが蛇行しているからだと言う。北国青森で猛暑日(最高気温が35℃を超えた日)を記録したのは11年ぶりのことだと言う。青森市で記録された最高気温は1994.8.12.の36.7℃、これに次ぐ36.6℃(2010.8.6.)で1999.8.10.と同じ観測史上2位の気温なのだそうだ。

昼の気温が高ければ夜の気温も高いままで、25℃以上を維持すると暑くて眠れなくなって蒲団の上で何も掛けずにのたうち回ることになる、「熱帯夜」と呼ばれる。毎年暑い地方では最近ほとんどの家ではクーラーが取り付けられている様だが、夏の短い北国ではクーラーなど無い家庭も多い。我が家も同じだ。

むしろ、時々現れる現れるオーツク海高気圧から吹き出す「ヤマセ」に備えて石油ストーブが何時でもスイッチONの態勢にあるのだ。こんな暑い夏には無用の長物だが、最近のストーブは大型化してちょっとやそこらで出したり、引っ込めたりは出来ないのだ。仕方が無いから多少狭く感じても「夏のストーブ」は鎮座することになる。

夏がやって来ると気になるのが主食であるコメの作柄だろう。豊作だと米の値段が安定して安心するが、凶作だと米価が上がるので個人的にも備蓄を考えたりする。下の図は気象庁で作成した北日本の夏平均気温と水稲の収量の関係を示したものである。

1945年(昭和20年)の大冷害を境に水稲の収量は右肩上がりに上昇しているが、これは戦後、藤坂試験地(現:青森県産業技術センター農林総合研究所藤坂稲作部)などの耐冷性品種の改良と稲作技術の進歩に依るところが大きい。しかし、収量の減少と冷夏の関連も明らかに見て取れる。冷夏は夏になってもオーツク海高気圧が居座って発達する年に起きやすい。いわゆる「ヤマセ」の吹き出しである。



オーツク海高気圧が発達すれば、梅雨前線上の低気圧に向かって北東風の冷気が吹き込むこの「ヤマセ」がしばしば大冷害をもたらしてきた。

青森県の旧藤坂試験地ではこの「ヤマセ」を克服するために耐冷性品種の育成に主眼を置いた研究がなされて来た歴史がある。その大恩人が田中稔氏だ。昭和10年初めて藤坂試験地に赴任した田中氏はこれと云った設備もなく、真夏でも12℃という冷水が流れる藤坂試験地で度一冷害に遭遇する南部地方の水稻について研究を始めたのだった。

当時の青森県では「陸羽132号」の作付けが普通であった。田中氏は場内にある12℃の冷水に目を付け、遂に耐冷品種藤坂5号を世に出すことに成功したのだった。昭和24年(1949)のことである。以来各地で色々な品種改良、保温折衷苗代、ビニール育苗、ハウス育苗と稲作技術が進化して図で見る様な反当り収量の増加傾向が続いている。

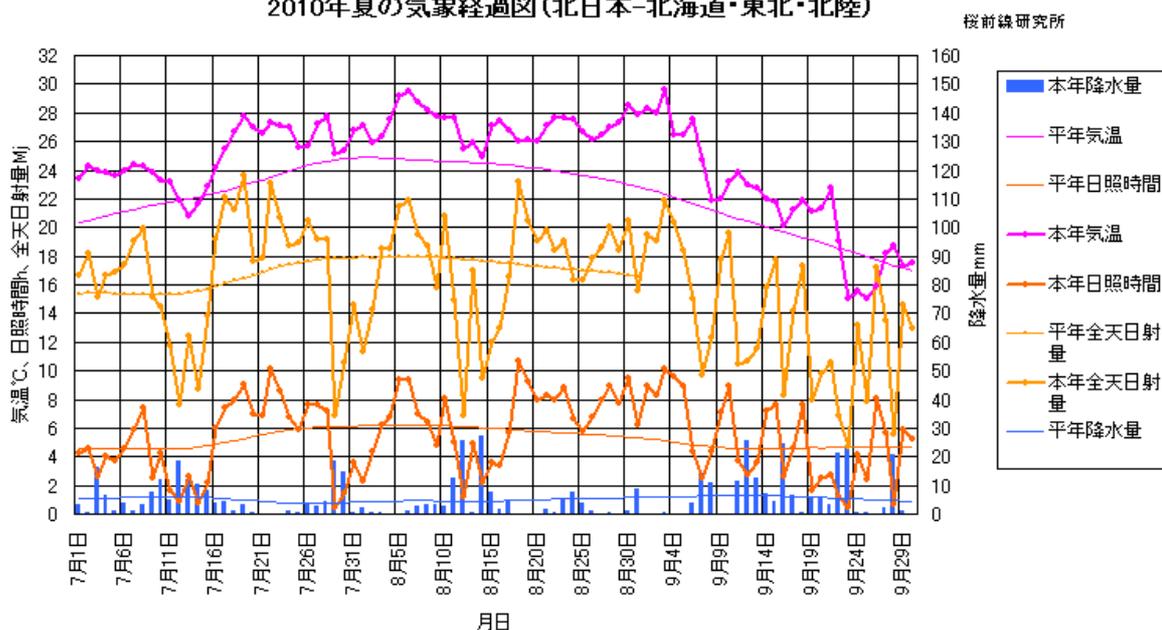
今年のように高温傾向が続くと心配になるのが「まつくいむし」の侵入である。一時秋田県との県境から250mまで迫った地点で被害木が発見されて、青森県ではかなり慌てて防除帯設置のためにかなりの税金を投入して松の木の強制伐採までやった。しかし、青森県に「まつくいむし」の被害が蔓延しないのは「ヤマセ」の影響に依るところが大きいと言うのが私の在職中の結論なのだが、今年はその「ヤマセ」が吹かなかった。そして人間も動・植物も経験した事の無い暑さが続いている。

下の図は2010年夏の気象経過図であるが平年値を4℃位も上まっているのが判る。

外ヶ浜町での「まつくいむし」騒ぎは「マツノザイセンチュウ」の寄生を受けていた苗木を関東地域から購入して緑化工事に植栽したのが騒ぎの基であったが、外ヶ浜地区はもともと「ヤマセ」の影響の大きい地域なので一過性の騒ぎで収まったようである。

いっぽう、最近では昆虫も車で移動する時代で、「マツノザイセンチュウ」を体内に抱えた「マツノマダラカミキリ」がとんでもない所で飛び出した例もある。危険地帯(一定の温度条件を満たしている地域)での蔓延はドライブインなどを中心に広がって来た傾向が見られた。情報によると弘前公園でも「マツノマダラカミキリ」の成虫が捕獲された事例もあったと言う。

2010年夏の気象経過図(北日本-北海道・東北・北陸)



<http://www.sakurazensen.com/kome/North-Japan.htm> より

元、「まつくいむし」問題の研究に携わったものとしては今年の異常な暑さに気が気でないのである。

かつては、気象観測データを参照するに、気象協会発行の「気象月報」と云うのがあった。図書室から東北各県の気象月報を何年分も借り出して毎日の様に当時のパソコン(自分でプログラムを作成できなければ只の箱)にせっせと月報の観測データを打ち込んでいた。現在では気象庁の統計資料から全国どこでも近年の観測データがコピー&ペーストの作業で簡単に収集できるようになっている。

3年前(2007年)定年後10数年経った身であったが、三村青森県知事の県境「まつくいむし」問題に関わる専決処分に元同問題の研究者の立場から持論の再検討を行ったことがある。70歳を過ぎた老人が25年前の持論を再検討(再計算)したのであるが、老人の夜鍋仕事で6ページの論文に纏める事が出来た(「松くい虫」の被害は青森県にも達するのだろうか?:森林防疫、Vol.56, No. 4, 2007)。

インターネットの普及で、私の在職中に比べれば非常に効率的に仕事が出来世の中になっている。在職中は1週間掛かって打ち込んだデータを一瞬の誤操作でパーにしたこともあった。現在では同じ内容の仕事が数分のコピー&ペースト作業で可能だ。計算作業も表計算ソフト「エクセル」で瞬時に可能である。自作のBASICプログラムを作っていた頃が懐かしい。(2010.8.20)